

# 穂坂 悠子 学位（博士）論文審査報告書

## 論文題目：日蓮聖人における女性観の研究

本論文は、女人教化や女人成仏論などの問題をとおして、日蓮聖人（1222-1282）の女性観について研究したものである。その論点は、初期仏典から法華経等の諸経典・論疏、中国・日本の法華仏教史上の主な諸先師、日本における鎌倉仏教の祖師の女性観に及び、それらの検討を踏まえて日蓮聖人における女性観の特色を明らかにしている。

本論文は、序章、本論九章、終章で構成されている。

序章は二節から成る。第一節「問題提起」では、従来の研究を検討し、その特色と問題点を指摘したうえで、本研究の課題・視点を提示している。第二節「本論文の構成」では、研究対象とその方法について説明し、論述の次第を明示する。

第一章「釈尊における男女平等観」は三節から成る。第一節「最初期の仏典にみる釈尊の男女平等観」では、初期仏教経典における比丘尼について検証する。第二節「女性に対する否定的表現とその超克の原因説」では、女性を否定的に表現する教説について取り上げ、その意図を探る。第三節「女身のままの成仏を示す経典」では、女人の即身成仏を説く経典について検討する。

これらの検証によって、最初期の経典においては男女の性差を踏まえたうえでの釈尊の平等思想に基づいて説示されていると結論づけている。

第二章「日蓮聖人所引の諸経論における女性観」は次の六節から成る。第一節「菩薩処胎経」、第二節「銀色女経」、第三節「大智度論」、第四節「超日明三昧経」、第五節「華嚴経」、第六節「涅槃経」である。日蓮聖人遺文に引用されているこれら諸経論の女性観を検証し、その引用文をとおして教示する日蓮聖人の意図について詳細に考察している。

第三章「法華経の女性観」は次の四節から成る。第一節「提婆達多品の龍女即身成仏説」、第二節「勸持品の比丘尼授記説」、第三節「薬王菩薩本事品の女人往生説」、第四節「女人に対する否定的叙述」である。一乗思想は悉皆成仏を意味することから、法華経における女人の成仏は必然的の道理である。法華経ではこれを主に即身成仏と授記とによって教示していることを各品の経文を辿って論証する。また、女人に対する否定的叙述は、「異性が修行の障害になる」との一般論に立脚した説示中に見られるものであり、法華円教の視点からすると、本質的には、女性は否定されるものではないとする。

これらの考察をとおして、一乗平等思想に立脚した法華経の女性観を明らかにしている。

第四章「天台大師智顛と妙楽大師湛然の女性観」は二節から成る。第一節「天台大師智顛の女人成仏観」では、『法華文句』における女人授記論や龍女成仏論を検討することによって、天台大師智顛における男女平等の授記・成仏観を論証

する。第二節「妙楽大師湛然の女人成仏観」では、『法華文句記』における龍女成仏論を検討することによって、妙楽大師湛然における法華円教の思想に基づいた即身成仏観を検証する。

これらの考察によって、中国天台法華教学の中枢である天台大師智顛と妙楽大師湛然の女人成仏論が、日蓮聖人によって継承され発展していったと指摘する。

第五章「日本仏教諸先師の女性観」は二節から成る。第一節「伝教大師最澄の女性観」では、『法華秀句』の即身成仏化導勝八の検討をとおして、「畜身」「女身」「幼少身」の龍女が即身成仏することは、法華経の「経力」に依るとする最澄の釈を確認し、「変成男子」は差別即平等の円融思想に依って理解されているとする。第二節「鎌倉新仏教における三師の女人往生・成仏観」では、法然上人・親鸞聖人・道元禅師を取りあげる。法然上人の女人往生論では、弥陀の四十八願中の第十八願には男女平等の往生が説示されているが、第三十五願（「女人往生の願」）には女性は女身を捨てて変成男子するとされていることから、「変成男子」「転女成男」の往生であるとする。親鸞聖人の女人往生論では、法然上人の女人往生論を継承しており、女人の五障・三従を認め、『大無量寿経』の第三十五願に基づいた女人往生論を積極的には説いていないことや、「変成男子」の語を用いていることから、女人の「即身成仏」という発想はなかったとしている。道元禅師の女人成仏観は、『正法眼蔵』「礼拝得髓」のなかで、龍王の八歳の娘が男性の身体となって成仏したという説を前提にして論を展開していることから、「変成男子」の成仏であったと推察している。

これらの検討を経て、伝教大師の女人即身成仏論は天台大師・妙楽大師の釈を受けたもので、天台法華教学の伝統に立脚しており、鎌倉新仏教における法然上人・親鸞聖人・道元禅師の三師の女人往生・女人成仏は、「変成男子」の思想に基づいていることを指摘している。

第六章「日蓮聖人における女人教化」は三節から成る。第一節「女性信徒宛遺文の確認と女性信徒の所在について」では、日蓮聖人遺文中から、女性信徒に宛てられたものを選出し、その遺文名・遺文番号・系年・対告者・対告者の居住地などを明示している。第二節「仏教教団および日蓮聖人門下における女人」では、日蓮聖人遺文中に見られる「比丘尼」「女房」「尼御前」「御前」「尼」などの呼称を上げて、仏教の教団構成という面からその意味を確認している。第三節「女性信徒への個別的教化の検証」では、信憑性のある日蓮聖人遺文中に見られる女性について全30項のもとに考察し、聖人の個別的な教化の特徴を検証している。

これらの考察をとおして、日蓮聖人の女人教化について、①女性信徒個人の立場や境遇、機根の浅深などによって、教化の方法や内容が異なる、②譬喩や故事等を活用し、表現に工夫をされている、③供養を捧げる女性達の深い志を讃歎し、その功德について法華経の証文を示し未来成仏を教示されている、④すべての女性に「悲母性」を見ておられる、⑤法華経提婆品の龍女即身成仏説を承け、龍女を即身成仏の手本とし、勸持品の摩訶波闍波提比丘尼と耶輸陀羅比丘尼の授記説をもって、女性信徒の未来成仏を保証し安堵を与えられている、⑥末代の世に生きる全ての女性が変成男子の成仏ではなく即身成仏によって救済されるという思

想に基づいて教化されている、⑦法華經における平等大慧の精神を継承し、男女共に尊重し合う平等観を基として教化されている、などの特色を指摘する。

第七章「日蓮聖人における女人成仏論」は、七節から成る。なかでも第一節から第三節は、日蓮聖人の生涯を（１）鎌倉期、（２）佐渡期、（３）身延期の三期に分けて考察する。第一節「鎌倉期における女人成仏論の特質」では、日蓮聖人の鎌倉期を視点として、女人成仏論の展開を考察している。ここでは女人成仏に関する記述が見られる『一代聖教大意』『葉王品得意抄』『法華題目鈔』『善無畏鈔』の四篇を中心に検証し、この時期においては、十界互具・一念三千などの教義論や法華經超勝論、法華經の開会思想などに立脚して教示されていることを明らかにしている。第二節「佐渡期における女人成仏論の特質」では、日蓮聖人の佐渡期を視点として、女人成仏論の展開を考察している。ここでは女人成仏に関する記述が見られる『開目抄』『日妙聖人御書』『祈禱鈔』『観心本尊抄』『木絵二像開眼事』の五篇と女性信徒宛五篇の遺文を中心に検証し、この時期においては、爾前經の女人不成仏、龍女の即身成仏、一念三千の成仏、女人の授記、法華經信仰の功德などに立脚して教示されているとしている。第三節「身延期における女人成仏論の特質」では、日蓮聖人の身延期を視点として、女人成仏論の展開を考察している。ここでは女人成仏に関する記述が見られる『撰時抄』『秀句十勝抄』などの教義書や多くの手紙類をあげて検証し、この時期においては、爾前經の女人不成仏についての言及が減少し、法華經信仰を賛嘆して女人成仏を説示する例が多くなり、また、龍女即身成仏、唱題成仏、女人授記などを積極的に教示されているとする。第四節「天台大師智顛・伝教大師最澄の説示の受容と展開」では、提婆達多品の龍女即身成仏や勸持品の比丘尼授記を積した天台大師智顛の法華教学が日本の伝教大師最澄に継承され、日蓮聖人はこれを受容、発展させて十界互具・一念三千を基盤とした即身成仏論を展開したとする。第五節「龍女即身成仏説の受容」では、法華經の説示とそれに関する天台大師智顛と伝教大師最澄の釈文をたどりながら、日蓮聖人は法華經本門寿量品所頌の事一念三千の法門に基づいて、提婆達多品の龍女即身成仏説を受容されたことを論証している。第六節「比丘尼授記説の受容」では、法華經の説示とそれに関する天台大師智顛の釈文をたどりながら、日蓮聖人における勸持品の比丘尼授記説の受容について考察している。第七節「二乗作仏と女人成仏の連関」では、法華經迹門の教えである二乗作仏は法華經本門の教えである久遠実成の開頭によって真実となるとの本化教学の視点を論じ、二乗作仏などの一切の成仏の現証は龍女の即身成仏に始まるとする。

以上、本章では、日蓮聖人における法華經弘通の生涯を鎌倉期・佐渡期・身延期の三期に分けて詳細な検証をおこない、日蓮聖人の女人成仏論について、①日蓮聖人の成仏論は本門の事一念三千に基づくものであり、そこを基盤として女人の即身成仏論も展開されている、②女身を男身に改めた「変成男子」の成仏を「改転の成仏」と称し、これを「有名無実」として退け、女人の即身成仏の実現を、本門の事一念三千に立脚した「法華經の信心」に論じられている、③他經に超越した法華經の救済力を教示することによって、女性信徒を教導されている、④龍

女即身成仏説や比丘尼授記説は、女性信徒にとって自然と自らの身に置き換えて受け止めることができ、教化の上で効果的であった、などの特色を指摘する。

第八章「『注法華経』にみる日蓮聖人の女人成仏観」は次の四節から成る。第一節「貧女の譬喩」、第二節「龍女成仏に関する経論釈の叙述・注釈」、第三節「女人授記に関する経論釈の叙述・注釈」、第四節「女人に関する経論釈の叙述・注釈」である。ここでは、日蓮聖人所持の法華三部経（『注法華経』）に注記された引用経論を抽出し、この引用文に該当する日蓮聖人遺文中の記述を指摘し検討している。

この考察をとおして、日蓮聖人の女人成仏思想との関係について検証を進め、女人成仏に関連する引用文は、主に巻五の「提婆品」、「勸持品」、巻七の「薬王品」の周辺・表裏に見られることを指摘している。

第九章「説話集の引用にみる日蓮聖人の女人成仏観」では、日蓮聖人遺文中に引用されている説話集のうち、とくに『宝物集』を取り上げ、説話の引用をとおした日蓮聖人の女人成仏観について検証している。

以上、本論文は先行研究をふまえたうえで、問題点を的確に捉え、実証的、論理的、体系的に課題を究明している。また、論者は、課題について独自の研究成果を示しており、日蓮聖人教学研究の進展に寄与するものであると評価できる。

なお、本論文の審査に際しては、文学研究科の内規により、平成27年2月7日に公聴口頭試問をおこない、論者の向学とその力量の确实なることを確認した。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応すると審査委員会は判断し、これを認定する。

平成27年2月25日

主査 立正大学大学院文学研究科仏教学専攻  
教授 庵谷行亨  
副査 立正大学大学院文学研究科仏教学専攻  
教授 北川前肇  
副査 立正大学  
名誉教授 松村壽巖